泣き虫先生とムカデ君たち

浜野卓也・作／小野かおる・画

浜野卓也

泣き虫先生とムカデ君たち

泣き虫先生とムカデ君たち

現代・創作児童文学 8

1975年12月／発行

著者／浜野卓也 1975 ©

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4－3
電話／東京03－861－1506(代表)
振替／東京0－64678

印刷／三浦企画印刷
製本／東京美術紙工

乱丁落丁本はおとりかえ致しますのでお求めの書店または本社へお申し出願います。

913 浜野卓也
泣き虫先生とムカデ君たち
金の星社 1975
214P 22cm(現代・創作児童文学 8)

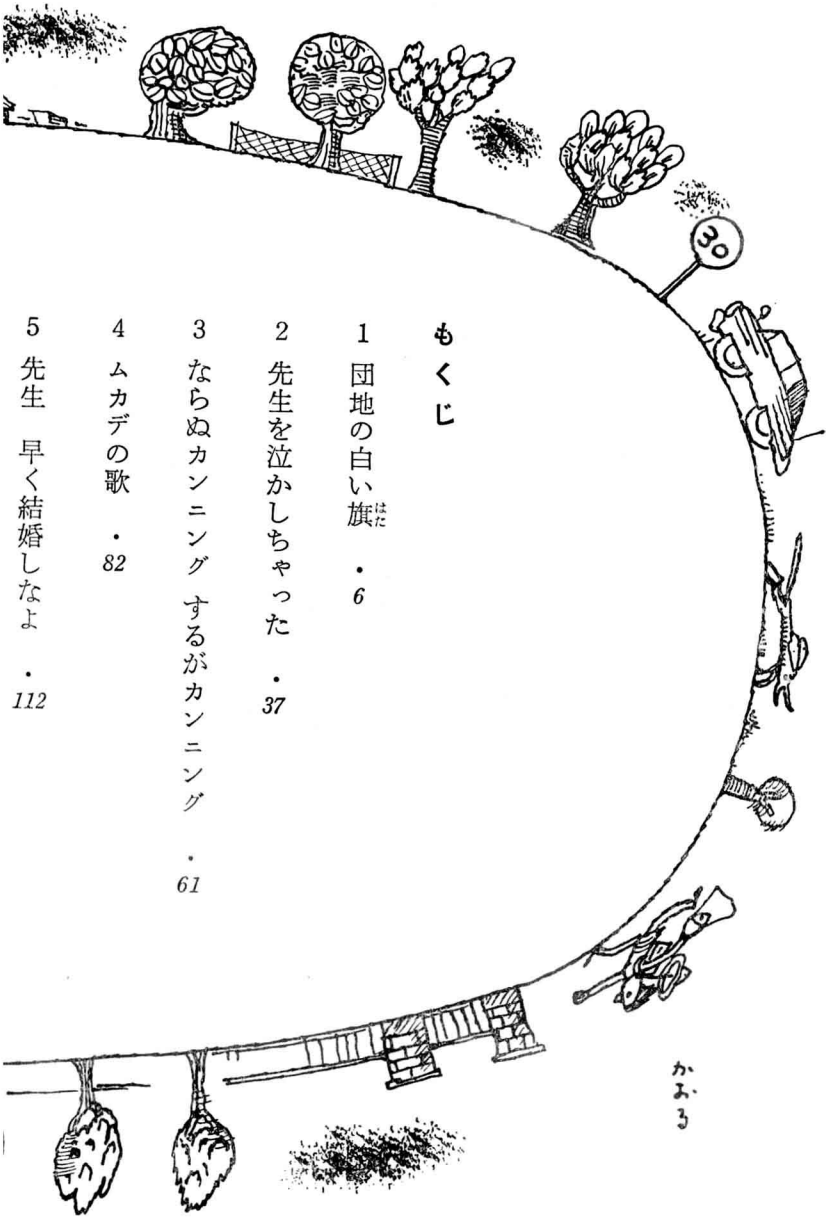
基本カード記載例

8393—042081—1406

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

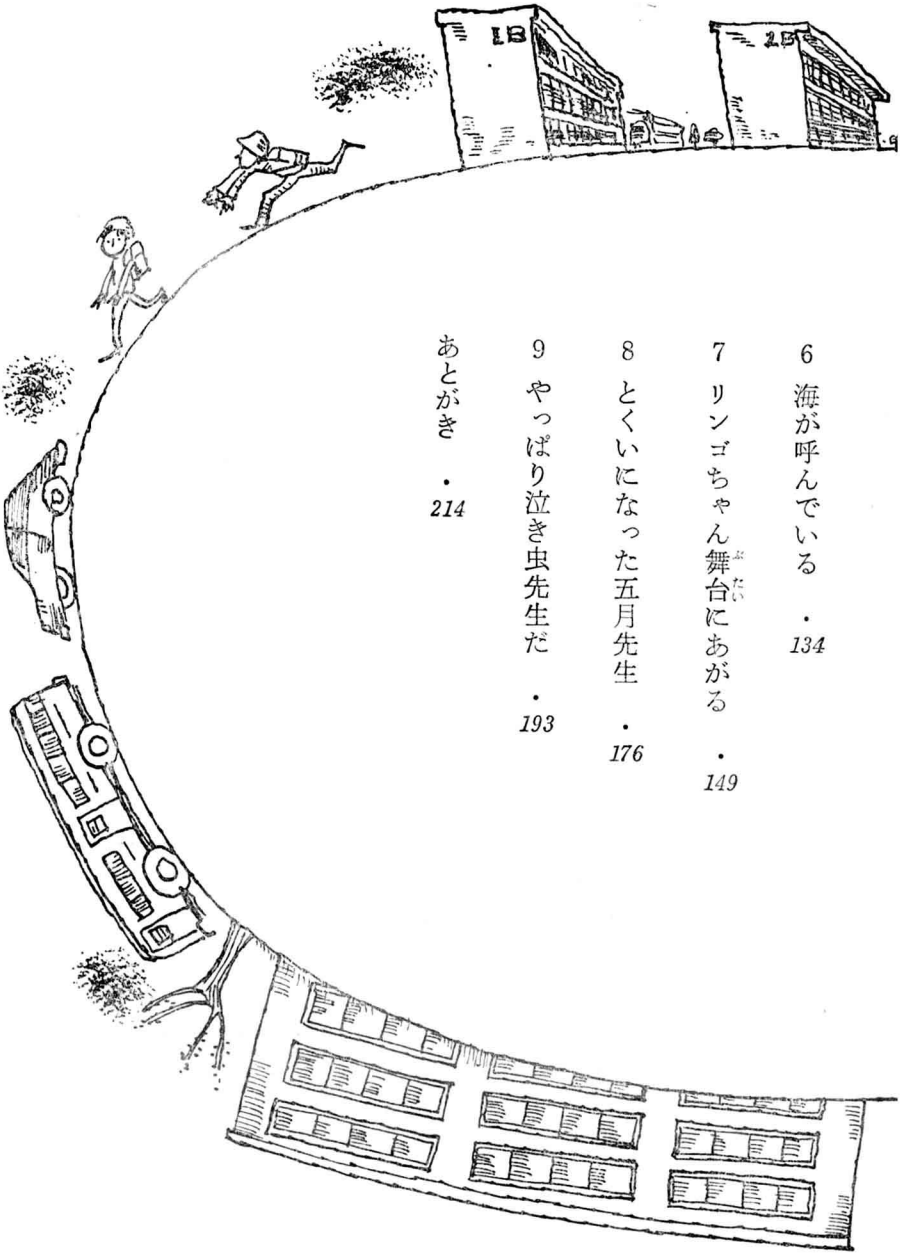
とにかく、よく泣く先生なんだ。
そのくせ、とてもこわいこともあるんだ。
でも、先生がいないと、
ぼくたちはさみしいんだ。
なんだか知らないけど、
みんな先生が好きなんだ。
先生は、ぼくたちみんないい子だから、
いい先生になれたというんだけど……



もくじ

1 団地の白い旗（はた） ・6
2 先生を泣かしちゃった ・37
3 ならぬカンニング するがカンニング ・61
4 ムカデの歌 ・82
5 先生 早く結婚しなよ ・112

かふる



6　海が呼んでいる　・134

7　リンゴちゃん舞台にあがる　・149

8　とくいになった五月先生　・176

9　やっぱり泣き虫先生だ　・193

あとがき　・214

作者・画家紹介

浜野卓也(はまの たくや)

1926年，静岡県に生まれる。早稲田大学卒業。日本児童文学者協会，日本児童文芸家協会々員。主な作品に『堀のある村』『おーい，ひょうたん村』『草原にさけぶ』などがある。他に評論などで活躍中。

現住所・東京都杉並区下高井戸1の42

小野かおる(おのかおる)

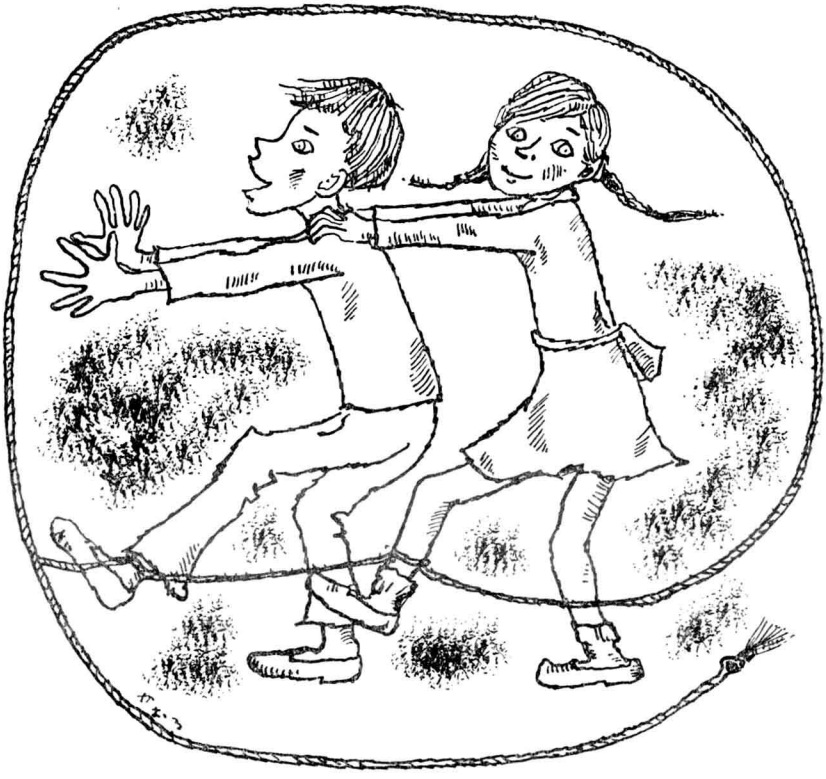
1930年，東京に生まれる。東京芸術大学美術学部洋画科卒業後，出版美術の仕事に従事する。「こどものくに」などに小さい頃から童画を発表。主な絵本に『とんだトロップ』『ゆびっこ』『かみなりごろうた』などがある。

現住所・東京都杉並区
阿佐ケ谷北2の32の4

現代・創作児童文学 8

泣き虫先生と ムカデ君たち

浜野卓也



〔1〕 団地の白い旗

東10号棟、25のブザーを押す。

「ただいま！」

「お帰りなさい。」

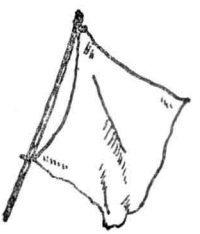
ドアが開く。顔を出しかかったママの鼻先に腕をのばす。ランドセルをもった手が、ひょろひょろとさしこまれる。〝テナガザル〟のニックネームをもつジュンの手だ。

ママが不思議そうにたずねた。

「どうしたの？　早くはいりなさいよ。」

「そうしちゃいられないよ。きょうはぼくの番だ。」

「番……って？」



「遊園地の場所とりだよ。」
ジュンは、じりじりする。
「勉強は？」
「学校で勉強してきたから、こんどはからだをきたえる番さ……いくよ、おやつちょうだい。」
「おやつぐらい家で食べなさい。ぎょうぎが悪いじゃないの。」
「そうしてはいられないんだよ。」
「だめよ、おやつは、お勉強と引きかえ。」
「じゃ、いらない！」
ジュンはとび出して、階段をおりだした。が、階段のとちゅうまでくると、
「ちょっと待ちなさい。ジュンちゃん！」
ママが、ドウナツとセンベイをもって走ってきた。
階段の壁のかげから、ジュンはぬっと姿を見せる。
「あっ！　おどろくじゃないの、そんなとこに隠れていて……。」
「やっぱり、ママきてくれると、ぼく信じてたよ。」
「おだてたってだめ。ちゃんと夕ごはんには帰ってくるのよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「わかってる！　わかってる……。」

二度目の「わかってる」をいったときは、階段から外にとび出ていた。

ジュンは遊園地のバックネットのあたりに立った。

今年になってから六年生は、私立の中学校の受験が近いせいか、あまり遊園地には出てこない。みんながみんな、受験するわけではないが、仲間の何人かがぬけるし、残った連中だけで遊んでも、なんとなくシラけてしまう。それに受験しないからといって遊んでいると、先生も親もあまりいい顔をしない。ついつい外へ出るのがおっくうになってくる。それで遊園地の野球場はなんとなく、五年生の支配下になったという感じである。

みどりが丘団地は東西、それぞれに六階だて十二の棟があって、ここには、ほぼ八十人ばかりの五年生がいる。

小遊園地が東、西、南、北に一つずつある。しかし、砂場とか、ブランコ、シーソー、すべり台……などで、これは低学年向きだ。野球やサッカーのできる高学年用の大きな遊園地は、団地のはずれに一つあるだけだ。それで場所とりの争いが起こり、強いもの勝ちで、同じ強いものどうしなら、早いもの勝ちということになる。

一分後、西棟の五年生が、かけこんできた。ジュンと同じクラスの黒ネコである。本名は猫田実だ、体育、鉄棒が得意。とび箱で、空中転回ができるのは、五年生ではかれぐらいのものだろう。近ごろ、中年ぶとりを気にする体育専科の北海先生が、

「おまえはネコみたいに身が軽いなあ。」

と、うらやましそうに、嘆いたことからつけられたニックネームだ。

学校では仲よしの黒ネコだが、この遊園地の遊びでは、東組、西組が単位になるので、「やあ！」「やあ！」というわけにはいかない。

黒ネコは、あきらめて帰ろうとした。

「黒ネコ！　もう少し待ってろよ、メンバーが足りなかったらいれてやるよ。」

「足りなかったら……」というのが気にくわないらしいが、それでも、黒ネコは、柵の内側のベンチに腰をおろす。

ハナケンがやってきた。クラス委員の大友健一である。

健一はジュンの一番のりで東組が遊園地を占領したのを見とどけ、

「よし、いいぞお！」

と、大きな鼻をびくつかせた。その大きな鼻は、テストで満点とれば、ぷーっとふくらみ、い

たずらが見つかって、しかられるときには、すーっとしぼむ。よろこびや、かなしみも、現わす鼻なのである。ハナケンのニックネームの由来もここにある。

もっとも、もの知りの健一は、なにかにつけて仲間に、知識のあるところをひけらかす傾向がある。

「あいつは、知識を鼻にかけている。」

との悪口もちらほら、それで〝ハナケン〟なのだともいう。

話に夢中になると、長い舌で、べろりと鼻をなめる。いや、なめたらたいへん、犬なみだ。でも一センチ足らずというところだ。

ニックネームの紹介をしていったらきりがない。ともかくつづいて、東組のメンバーが、バット、グローブを手にしてぞくぞく集まってきた。

西組の子どもたちもくるにはくるが、一目であきらめ、なんとなくベンチにすわりこんで、東組が、バックネットの前でキャッチボールをしているのを見てたり、そのまま、向こう側の、ブランコやジャングルジムのそばにいってしまったりする。

ふつう、五年生ぐらいになると、子どもたちは家に帰っても、クラスの友だちと遊ぶ。でも、このみどりが丘団地の子どもたちは、遊園地で遊ぶときは、クラスより、東組は東組で、西組は

西組で遊ぶことが多い。

もちろん、学校へいけば、いっしょのクラスの子もいるわけだから、声をかけてさそって、東組の十二人に西組が六人参加して野球することもある。

だがこんなとき、ピッチャー、キャッチャーなどのいいポジションは、多数組、つまりこの場合は東組がしめて、ボールのとんでこない外野は西組ということになる。

つまり、ポジションを決める権利は、一分でも先にこの場所でプレーをしていたものにある。

では、東組と西組の生徒の二人が、キャッチボールをしていたらどうなるかといえば、ふつう、野球は、一人ではできないから、近所の子をさそい合ってくることが多い。だから、遊園地使用の一番手は、東組か、西組のどちらかになる。

東と西とは、べつに仲が悪いわけではない。ただ、ちょっと、シラけるといった感じはある。なぜだろう。

東と西では、春に子ども対抗野球試合、秋には、おとなもまじえた対抗形式の運動会があり、「対立的雰囲気が生じる」という人もあるが、子どもたちは「そんなことは絶対ない」と否定する。

しかし、理由らしい理由といったら、このほか考えられない。

「さあ、はじめようぜ……ぼくピッチャー。」
ジュンが、みんなを集めながら名のりをあげる。
「ぼくはサード。」
と、ハナケン。みんなちょっと顔を見合わせる。
サードというのは、なにしろジャイアンツの長島が十七年間も守ってたところだ。メガネかけたやせっぽちのハナケンじゃしまらないのだが——。
しかし、いざ数えてみると東組も七人しかいない。
「近ごろ急に集まりが悪くなったなあ。」
ジュンは、ためいきつきながらベンチの西組の子どもたちに、
「おい、いっしょにやろうよ。」
と声をかけた。すると、
「いいだろう。」
と、連中が、ぞろぞろと立ちあがって、バックネットに近づいてきた。
西組の中には、女の子が二人いた。ノッポの子と、デブの子だ。
ノッポの方がジュンを見てにやっと笑った。ショートカットのくりくりとよく目玉の動く西村

ふみ子だ。ジュンとは、母親どうしが、大の仲よしで、あまりそっけなくできない。
「わたしも仲間になってあげるわ。」
「ちえっ！　ま、いいだろう。」
「でも、わたしピッチャーよ。」
ノッポのふみ子が、大きくピッチングフォームをして見せた。
「だめだよ、ピッチャーは、男の子がやらないと、だれるもん。」
「じゃ、やめたーっと。」
ふみ子はすこしデブの丸山めぐみを連れて、すたこらベンチへ帰りかける。
「ヒミコさん待てよ。」
ジュンがあわてた。あわてたしょうこには、〝ふみ子さん〟と呼ぶべきところを、あだ名で呼んだのでもわかる。ゆうゆうと丸山めぐみをしたがえて立ちさる西村ふみ子のうしろ姿はまったく、一学期、社会科でならったヤマタイ国の女王ヒミコのようにかんろくがある。
呼ばれたヒミコは立ちどまってふりかえると、パチン！　と大きく指を鳴らした。
「なによ、テナガ。」
ヒミコは、あだ名でかえした。

ジュンの手は（正しくは腕というべきだが――）高校生の兄よりも、パパよりも長い。
一番はじめに気がついたのはパパで、小学校へはいったばかりのころキャッチボールをして気がついたという。
「ジュンの手は長い、ピッチャーにはもってこいだぞ。」
とパパはよろこんだが、
ママは、
「いやあね、テナガザルじゃあるまいし。」
とあしらい、仲よしの、ヒミコのママにしゃべった。それがヒミコにつたわり、そのヒミコがクラス中に広げたというわけだ。
女の子にあだ名で呼ばれ、ふくれかけたジュンの耳に、
「ここががまんのしどころだぜ。」
と、ハナケンがささやく。
「ふみ子、ピ、ピッチャーやらせるよ。」
「じゃ、はいってあげるわ。それから、無用の投手交替はみとめないわよ。」
なるほど、フォアボールを一つ出したところで、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com